



彼女は同じ会社に勤める
新米アニメーターだ。

俺と部署こそ違うが、
好きなアニメの話で意気投合し
すぐに付き合うことになった。

ニハ
ニハ...

トー

ニハ
ニハ



「ごめん、このカットの動物の動き
作監から全リテきちゃって」

「あ…はい、やっております…」

アニメーターは苦勞が多いと知ってはいたが、
それにめげず夢を追いかける彼女を見ていると
なんとか支えてあげなければと思う。

ぐわん

特に今日はリテイクの量が多く、

ドツボにはまっている様子だったので
しばらく外に連れ出して気分転換を
することにした。

ドサッ



2人で近所の緑地公園へとやってきました。
都会の喧騒から逃れるにはうってつけの場所だ。

「あ、子猫ちゃんだ」

人に慣れた様子の子猫は、逃げることもなく
その場に寝っころがる彼女としゃべり始めた。



「こんな風に足を動かさずだ、知らなかったなあ」

と、子猫のマネをしながら

動きを観察する彼女を眺めている。

チラチラとピンク色の布地が目に入ってきた。

その瞬間、下半身が熱くなっているのを感じた。
相変わらず彼女は子猫に夢中なため、
無防備なスカートの間からのぞくパンティ
気付く様子もなかった。



俺は周囲に人がいないことを確認すると彼女に声をかける。

「あっ……ごめんね、退屈させちゃったかな……?」

「そうじゃないんだ、実は俺も観察したいものが
あったの……」



「ほ、恥ずかしいです…」

彼女に上着をまくらせると、
華奢な体に見合わない大きな胸が
飛び出してきた。



呼吸を止めたら胸が
びるびる揺れて、思ひが胸の
ところを衝動にからまれる。

しかし一度スイッチが入ると
止められなくなるので
なんとも踏みこまないんだ...

...のだが。

「私だけ恥ずかしいのは
すまんと思ってるよー」

そう言うと、彼女はおもむろに俺の前にしゃがみ、
息子をスポンから取り出した。

「Lunchtime長持ならいそげおね〜」

ガチガチに勃起した俺の息子をおっぱいの間に
挟み込むと、たぶたぶと上下に揺られて始める。





「やばっ、もうEENYー」

そう叫んだ瞬間、目の前が真っ白になり
大量の精液を発射した。

「ひゃあああんっー」

顔にも、胸にもっぼろ熱いのがかかってるっ……」



ようやく全ての精液を出し終えた頃、
彼女の上半身は白濁でドロドロになってしまっていた。

「私の胸でこんなに出してくれたんだね……
なんか嬉しいな」

あの状態のまま会社に戻るわけにもいかず、
彼女の家で体を洗う事にしたのだが、
背中を流してくれるという言葉に甘え
一緒に入る事になった。

ゴシゴシ

ムニョ



ごしごしとスポンジで俺の体をこするたび
上下する柔らかな感触が心地いい。

「前のほうも洗うね」

鎖骨、胸部へと腕を回し、ますます密着する体に
ふたたび俺の息子は元気を取り戻していく。

ゴシゴシ

ムカ

イビ



彼女の手が俺の下腹部で止まった。

「あっ、また大きくなっちゃったんだ……」

苦しうらやけうらやけ息子を彼女の手が
優しいなぞ。

「すんぽんぽんしてあげるね」

そう言うと、大量の泡を潤滑油にして
息子をじじまはじめた。

こすこす

んんん

んん



「これですっきりしたかな？」

……って、ひゃあああん！」

背中当たっていたおっぱいの感触を

もっと味わいたいと、俺は彼女に向き直って
胸にむしゃぶりついた。

ちゅぱ

いっ

いっ





「もう…赤ちゃんみたい。
甘えんぼさんなんだから」

そう言いながら俺の頭に手を浴え
まるで赤ん坊をあやすように
俺の行為を受け入れていた。

「あんっ…はあっ……」

「私もなんだか熱くなってきちゃった」

ちゅぷ

んん

ドキ

ドキ





風呂から上がりの体を拭くと、
そのまま彼女を布団に押し倒した。

「おちんちんすごい大きい……
全部入るかな」

不安そうにまなざしで俺を見つめる。
その表情が更に挿入への欲望をかきたてた。

ギンッ

ドキ

ドキ



俺は息子をワレメに押し当てると
ゆっくと彼女の膣内に挿入していった。

「んあああ、はあ……
おちんちん……入ってきてるらー！」

すでにお互いの性器から出るヌルヌルで
スムーズに挿挿が進む。

「あ、や、はあん！」

「奥まで……届らしてる……！」



「また…元気だね。」

……次は臍肉で出してほしいな」

セックスの快感をおぼえた彼女は

俺の上でまたがると、積極的に腰を振り始めた。

「あ…う…う…う…」

おちちんをさくさくして腰をまたぐのよー」



んっ

ム

ズワッ

ゆちゃ



下半身がブルブルと震え、

おっぱいの感覚がよみがえってゐる。

「臍肉で…臍肉で出すからなっ………！」

「いらよ……おなからっばらっばらなまを

たくさん射精してっ……！」

いつしか俺も腰を突き上げ、

絶頂へのラストパートをかけていく。

「んっ、ははははははははああんっ……！」

彼女の叫びと共に俺も果て、

臍肉にこれでもかと言っほい白濁をひたしました。

やがて行き場を失った精液がこぼこぼい

接合部から溢れしめる。

「私の臍肉、おじさん嫌い………
やっやっやっやっやっ」

あゝあゝ

こぼっ

ビュル

ビュルルルル



ちよつと散歩するつもりが、会社に戻った頃には深夜近くになってしまっていた。

ガタツッ！

「うわっ、突然どうしたんですか!？」

突然の物音に、帰りの支度をしていた同僚の女の子が声を上げる。

「あ、ああ…いや、一瞬意識が飛んじやってただの寝不足さ」

「ちゃんと寝なきゃダメですよ。

これからが正念場なんですから!」

「そうだね、今日はもう少ししたら切り上げるよ」

お先です!





「方机の下では、四つん這りになった彼女が
俺のモノを睡せこんだぞだ。

「まっ…あんなに可愛くはないよ」

キラキラ
キラキラ
キラキラ
キラキラ

か♡
い♡
ろ♡
い♡

そのまはあまの気持ちのせいで射撃をこころま
うつかの物音を立ててしまったが、
なんとか誤魔化せたようだ。

「じゅん、んっ…
まだびゅんびゅんが止まらないっ！」

キュン

同僚の子が帰宅し、室内に誰もいなくなった事を確認すると、彼女を机の下から出した。

「会社の中でこんな事しちゃうなんて……でもすごく興奮するね」

たしかに、同僚に見られるかも知れないというスリルが2人の感情をより昂ぶらせていた。俺は彼女を柱の前に立たせ、背後からいきなり立つ息子をワレメにあてがった。

ガッ





膣内を進んでいくと、体勢の違いからか
これまでとは違う刺激に包まれていた。
彼女も同じで、抽挿するたびに
訪れる快感に顔を歪ませる。

「あっ、んっ……」

「おちんちん「リ」リって……きゅうん……」

ん

ん
ん

ん
ん



「んああああうー！
私の膣内……満たされてる……」

腰を前後させるたび伝わる
尻肉の弾力により、絶頂に至るまで
そう長くはかからなかった。

ドビュッ
ジュッ
ジュッ
ジュッ
ジュッ
ジュッ

「まだ、旦那様ね……」

もちろんさ、と俺は椅子に腰掛けると
彼女をその上にまたがらせた。

「おちんちん生えてきちゃったみたい」

そう言って愛おしそうに亀頭をなでると、
息子はムクムクと力強さを取り戻していく。

フム♡

キッ

もみっ

ズンッ



奥に到達するたびに締め付けられる
搾り取られるような感覚に襲われる。

「ひあああああああっ……」

深々と突き刺さった接合部から
大量の精液が噴き出してくる。

先ほど膣内に射精した分と彼女の潮とが混ざり
垂れ落ちる白濁はしばらく止まらなかった。

「えへへ……全部出し切っちゃったね

……っで、えっ!?!」

あゝ♡

ひん♡

ジュルルッ♡
お♡
ドボン ドボン



